

中国短期大学における選択科目「ポピュラー・ソング」の指導目標と教材 — 指導目標の設定と授業実施のための選曲 —

Research on the Objectives and Materials of the Course “Popular Song” at Chugoku Junior College
— Setting the Objectives and Selecting Songs for Classes —

(2009年3月31日受理)

大橋 典晶

Noriaki Ohashi

Key words : 英語教育, ポピュラー・ソング, 目標, 教材

概 要

中国短期大学英语コミュニケーション学科1年生の学生を対象に、選択科目「ポピュラー・ソング」における指導目標の設定と教材の決定手順を実践的に研究した。その結果、指導目標としては、英語力の伸長を最終目標としながらも、授業の目標としては、「楽しく、リラックスした」環境づくりによる学習の促進を中心とすることが適当であると考えた。英語力の養成については、最終的な目標とはするものの、授業内での指導目標としては副次的なものとする事とした。教材の決定（選曲）については、指導者が熱意を持って使用できる曲を選んだ後、その中から学生が学びたいと思う曲を選ぶという過程が、教室内での学習の促進に有効であることを示した。

はじめに

中国短期大学（以下、「本学」と言う）では、2008年度入学生から「ポピュラー・ソングA・B」を英語コミュニケーション学科（以下、「本学科」と言う）の専門選択科目及び他学科公開科目として導入した。2009年度入学生からは「ポピュラー・ソングB」を廃し、「ポピュラー・ソング」として1年生前期（他の学年・学科からも履修可）で開講している。本学科は「英語“楽”習」をキーコンセプトとして専門教育を行っており、「ポピュラー・ソング」も「“楽”習」の一翼を担うべき科目である。なお、本稿は、科目「ポピュラー・ソングA」での取組をまとめたものであるが、科目名の変更が行われたことに伴い、タイトルでは変更後の科目名である「ポピュラー・ソング」という名称を用いている。以下においても、科目名は「ポピュラー・ソング」（本文においては「本科目」と言う）とする。また、本稿で言う「ポピュラー・ソング」とは、英語の歌詞を持つ曲全てのことであり、音楽

の専門分野における分類にかかわらず、指導者が英語学習に使えると判断した楽曲を広くカバーすることができる用語として用いている。

1. 科目「ポピュラー・ソング」の位置づけ

まず、本学の学生の英語力養成と本科目との関係について概観する。カリキュラム上は、2008年度と2009年度の本学科入学生に適用される「英語パフォーマンス・アーツコース」のコース指定科目である。つまり、「さまざまな身体活動を通じて英語を体得」（本学学校案内2009）するための選択科目のひとつである。無論、本科目のみで英語力を身につけることを目指しているのではなく、カリキュラム全体を通して英語力を養成するという視点は以前から不変である。

本科目導入以前も、英語の歌を授業に取り入れることは、本学科で開講されている授業科目において実践されてきているが、あくまで授業の環境づくり（楽しい雰囲気

気づくり)や興味付けとしての導入が中心であり、シラバスの「授業の目標」に記述することに馴染むものではなかった。

中学校・高等学校においても同様の導入がなされ、特に中学校においては毎時間の授業の冒頭などで歌を歌うなどの取組がなされている実践に出会うことが多い。この場合も、単元や本時の目標として「積極的に歌を歌う」などの指導目標を目にすることはあるが、中心的な指導内容であるとは言い難い。学習指導要領においても、歌を授業で取り扱うことを明示しているわけではない。中学校検定教科書には、歌詞や楽譜が掲載されており、実態に即したものにはなっているが、先生方は自作教材を作成している場合がほとんどである。

このような中学校・高等学校での経験を持つ本学学生に歌を使つての指導をすることになるが、大切なことの第一は目標の設定であると考え。そこで、次項では目標設定に関する先行研究を概観し、本科目の目標設定を考察する。

2. ポピュラー・ソングを教材とする場合の指導目標

本項では、指導目標についての検討を行うが、理論的背景を検討する際の前提として、指導者は音楽の専門家ではなく、楽器の演奏技術も持たないこと、さらに、学生も音楽を専門としていないことを確認しておきたい。したがって、教室に楽器を持ち込んで指導者や学習者が演奏することは、興味付けとして極めて有効であることは認めるが、演奏技術を持たない以上は、CDやDVDなどを利用して授業を進めることになる。学生が興味に応じて演奏することを排除するものではないが、授業では、曲を聴き、歌うことが中心となる。また、学習活動の最終段階として全体でひとつのステージを行うような、歌のパフォーマンスを目標とするのではなく、英語の音声に親しみ、内容を理解して、歌を楽しむことを中心とする。Le (1999)は、教室における音楽(歌だけではなく、器楽を含む)の役割を2つの側面に大別し、音楽を経験する者としての学習者を中心とする側面と、ステージや録音のような産出物を中心とする側面を指摘しているが、本項は前者を念頭に置いた議論であると理解いた

きたい。

本項では、まず、言語学習における歌の有効性や重要性について述べた内外の文献からの引用を行い、その共通点を検討することによって、設定可能な指導目標、あるいは望ましい指導目標に迫りたい。

最初に、Schoepp (2001)は、教材として歌を用いることが有効である理論的背景として、情意的理由、認知的理由、言語的理由の3観点を挙げている(以下は、筆者のまとめ¹⁾)。第1の観点である情意的理由では、クラッシュの情意フィルター仮説を引用しながら、情意フィルターを弱める方法のひとつが歌であると述べている。歌を用いることで言語学習が楽しくなるという側面は、情意的理由に直結している。次に、認知的理由では、歌は、言語使用の自動化²⁾を発達させる機会を提供すると述べている。コミュニケーション的な教授法では、自動化のためには、学習者が真にコミュニケーションのために目標言語を使う環境が必要であるが、歌は、その性質として、繰り返しを意味の一貫した文脈の中でかなりの程度持っている。3点目では、言語的理由として、歌が口語表現の優秀な例示であることをあげている。つまり、歌の歌詞に触れることは、学習者が今後出会うであろう本物の言語に向けての準備となる。これらと同時に、歌は、教室外で出会う英語の主たる情報源であることを指摘している。

次に、Murphey (1992)は、言語学習における音楽と歌の重要性を次の10点から述べている(6-8:筆者によるまとめ)。

- 1 外国語は、話すよりも歌うほうがやさしい。
- 2 幼児の発する音楽的な「バブバブ」音とそれをオウム返しに返す親とのやりとりは、言語発達にきわめて重要である。
- 3 歌は、いわば青年期における母親言葉であり、青年期において減少していく周りからの愛情を補い、欲求を満たす。
- 4 現代生活には音楽があふれていて、逃れることは不可能である。ゆっくり音楽や歌を聴けるのは学校だけのようだ。
- 5 最後に聞いた歌が頭の中で流れ続ける現象は、音楽が短期記憶・長期記憶に作用している証左である。
- 6 歌を歌うことはピアジェの「自己中心的言語」に

¹原文が日本語でない場合は、著者の拙訳、または日本語によるまとめである。以下同じ。

²意識的な努力をせずに、入力される情報を自動的に処理できるようになること。学習した言語項目を瞬時に使用できるようになることも含まれる。(白畑ほか(1999))

似ており、自分が繰り返す声を聞くのが楽しいのである。脳には、反復を行って音に意味づけをしようとする傾向があり、歌は、チョムスキーの言う「言語習得装置³」の持つ反復機構を強く活性化させるのだろう。

- 7 一般に、歌は単純な会話的言語を使っていて、反復も多いので、教材としてよい。感情がこめてあるので、他のテキストよりも動機付けとして優れている。同時に、統語・語彙などから見て複雑なものもあり、分析的な授業に馴染む場合もある。
- 8 歌は、聞き手の目的に合わせてそれぞれに解釈することが可能であり、時・場所を問わず、自分の身近な人たちについての歌として解釈できる。
- 9 歌は、人をリラックスさせる効果がある。単調さを払拭し楽しさを与えて、一人ひとりの内面と学習者集団の中とに調和を生み出す。
- 10 実践に移す場合にも、歌はまとまりのあるテキストや録音・映像であり、授業で扱いやすく、入手も簡単である。

また、Murpheyは、授業実践に移す場合には、可能な限り学習者に選択権を与え、活動の中心に学習者を置くことを強調している(14-15)。

さらに、Lems(2005)は、音楽を授業で用いる場合の目標として、次の項目を挙げている(15-20:筆者によるまとめ)。

- (1) 肯定的な態度と情意: 最小のコストでクラス全体を即座にリラックスさせる。
- (2) リスニング理解力: 歌の利用価値の第一はリスニング理解力の向上であろう。歌詞の行単位での並べ替えなどの活動ができる。
- (3) 発音練習: 歌の歌詞は口に出して歌うのが容易で、また、リズムの調子が(必ずとは言えないが)話し言葉の強勢のパターンと合致するので、発話の上達を助ける。
- (4) ライティング活動: インストルメンタルの曲について自由に書く活動が考えられるほか、歌詞の一部の入れ替えなどもできる。
- (5) リーディング力と語彙力: 学習者の興味をとらえる教材として優れている。文構造・主題・文化の3点から取り扱えるほか、現代的な言い回し・文化、

口語表現が含まれている。

このように、Lemsは、情意面と4技能の側面から歌を使った授業の目標を整理している。

ここまでは外国の文献であるが、次には日本での実践を念頭に置いた文献を検討する。まず、中嶋(2000)は、英語の歌を授業で用いるメリットを次のようにまとめている(22)。

- 音感がよくなると、語学が学習しやすい。
- 遊びの感覚で気楽に入ることができる。
- 教師と生徒のラポート⁴がしやすい。
- 歌を歌えるようになることで自信が生まれる。
- 頭に長く残りやすいので、文法や単語などが定着しやすい。
- 繰り返しが多く、一定の型ができているのでなじみやすい。
- 詞の内容やメロディーと自分の感情とを一体化させられる。
- 自分の考えや生き方をだぶらせられるので、こだわりが生まれる。
- 選曲次第で教科書から学ぶ以上の波及効果が生まれる。
- 平和や環境問題、人権問題などに関心が高まる。
- 音読、速読の練習に興味を持つようになる。

さらに、土屋(1996)は、ポピュラーソングにおける文法について、次の点を指摘している(7-9:『 』は原文のまま)。

『歌は口語表現の宝庫である』、『歌は文法を破る』、『歌は文法の変化を先取りする』、『歌には古い表現が残る』、『歌には省略がある』、『歌には倒置がある』、『歌は単語の発音を変える』、『歌手が変わると歌詞が変わる』の8点である。

さて、ここまで、5つの文献から歌の有効性を列挙してきた。これらの引用から共通点をまとめ、Schoeppの3観点に入れ込んだのが表1である。

³Language Acquisition Device: 生成文法(Generative Grammar)で仮定される、私たち人間に生得的に備わっている母語(の文法)を習得する装置。最近では、一般的に普遍文法(Universal Grammar)と呼ばれている。(白畑ほか(1999))

⁴rapport: 信頼関係、心の通い合い

表1 言語学習の教室における音楽のもたらす効果

情意的理由	最小のコストで学習者がリラックスでき、言語学習が楽しくなる。
	聞き手の目的に合わせてそれぞれに歌詞を解釈することが可能であり、詞の内容やメロディーと自分の感情・考え・生き方を一体化させられる。
	話すよりも歌うほうがやさしく、気楽に始められる。
	青年期における周りからの愛情の減少を補い、欲求を満たす。
	学習者同士、及び教師と学習者の間の心の通い合いがしやすい。
	歌を歌えるようになることで自信が生まれる。
認知的理由	繰り返しの意味の一貫した文脈の中でかなりの程度持っているので、なじみやすく、言語使用の自動化を助ける。
	最後に聞いた歌が頭の中で流れ続けたり、頭に長く残ったりしやすいので、文法や単語などが定着しやすい。
	音感がよくなると、語学が学習しやすい。
言語的理由	歌の歌詞に触れることは、学習者が今後出会うであろう本物の言語に向けての準備となる。
	歌は口語表現の宝庫である。
	歌は古い表現も残している一方で、文法の変化を先取りしている。
	統語・語彙などから見て複雑なものもあり、分析的な授業になじむ場合がある。

表1から考えられることは、情意的理由・認知的理由・言語的理由を考慮しながら教材を選定し、授業を実施するに当たっては、情意的側面における効果を最大限に引き出すよう配慮すべきであるということである。英語力の伸長については、最終的な目標ではあるものの、指導者の心構えとしては、むしろ副産物とするほうが適切であると考えられる。というのは、分析的・説明的になるほど、学習者が思考し活動する時間が少なくなり、それにつれて情意的側面における効果が減少すると考えるからである。したがって、授業では、歌詞の内容を理解する活動は行うが、可能な限り分析的な考察や説明を減らし、概要が大まかにとらえられれば、細かい点までの正確な理解よりも、各自が感じ取る内容のほうを大切にすべきであろう。可能な場合には映像も使いながら、1回でも多く曲を聴いて、その曲に慣れ親しみ、歌う活動につなげていきたいと考えている。そうすることによって、授業後にも学習者の頭の中で曲が流れ続けることが期待できる。さらに、学習者は授業外においてもその曲を自発的に聴く可能性が高まり、さらには、同じアーティストの曲、カバー曲に興味を持つだけでなく、ポピュラー・ソング全体に対する関心が高まると予想される。

3. 教材の選定

目標の検討に続いては、教材の選定を検討する。具体的には、どの曲を授業に使うかの決定の過程である。

前出のLems(2005)は、授業で用いる曲の選択について、「選曲規準については、これまでも多くの論文が存在するが、簡単に語りつくせるものではない。単に教師が本当に好きなものを選ぶことをすすめる。というのは、教師がその曲を好きであれば、授業計画がよいものとなり、教師の内面にある熱意が学習者に伝わるからである。」と述べている(16-17)。また、Murphey(1992)が強調したように、学習者に可能な限り選択権を与え、学習者を活動の中心に置くことが大切である。

このLemsとMurpheyの指摘を基にして、2008年度の本科目の選曲については、指導者がその曲を好きであること、指導者がその曲の歌詞が学習者の習熟度・興味等に合っていると考えること、そして、学習者が選択した曲である(少なくとも、そう感じられる)こと、の3点を満たす曲を使うこととした。具体的な手順としては、まず、指導者が好きであり、かつ教材として適切であると思う曲を57曲選択した。この57曲という曲数は、残り14時間の授業で扱えるであろうと考えた曲数である20曲の

約3倍である。この57曲の一節ずつ（13～20秒／曲）を抜き出したサンプルを作成し、最初の授業でこのサンプルを聞かせながらアンケートを実施して、学習者に学びたいと思う曲を選ばせた。学習者は、本学入学前に、すでに「1 知っていた」、「2 歌ったことがあった」、さらに「3 学んでみたい」の3点について、そうである（と思う）場合は丸（○）を付けて答えることを求められた。全ての項目に丸が付くこともあるし、いずれかの項目だけに付くこともあれば、まったく丸が付かないこともあるという前提で回答した。

アンケート結果は、表2にあるとおりである。数字の1～3は、「1 知っていた」、「2 歌ったことがあった」、「3 学んでみたい」に対応する。それぞれの項目にある数字は、その曲の各項目に丸を付けた学生の人数である。曲は「学んでみたい」とした学習者数が多い順に並べてある。同数の場合は、「1 知っていた」学習者が多い順とした。最下部の2曲は、このアンケートの時点ではリストになかったが、授業を進める中で指導者が追加した曲である。

表2 選曲のためのアンケート集計

n=23

曲名 (カバー曲を含む)	アーティスト	1 知	2 歌	3 学	選曲
Oh, Pretty Woman	Roy Orbison	23	4	12	○
Don't Want To Miss A Thing	Aerosmith	22	8	12	○
I'm In The Mood For Dancing	The Norlands	22	5	12	○
Top Of The World	The Carpenters	23	12	11	
Take Me Home, Country Roads	John Denver	22	11	11	
Stand By Me	Ben E. King	22	5	11	
Can't Take My Eyes Off You	Sheena Easton	23	9	10	
Let It Be	The Beatles	21	12	10	
Yesterday Once More	The Carpenters	21	13	9	○
Saturday Night	Bay City Rollers	23	3	8	○
Honesty	Billy Joel	16	1	8	○
The One	Backstreet Boys	13	3	8	○
Dancing Queen	ABBA	22	7	7	
Sir Duke	Stevie Wonder	21	2	7	
Daydream Believer	The Monkeys	21	1	7	
Ob-La-Di, Ob-La-Da	The Beatles	20	7	7	
I've Never Been To Me	Charlene	9	1	6	○
Piano Man	Billy Joel	17	1	5	
Itsy Bitsy Teenie Weenie Yellow Polka Dot Bikini	Brian Hyland	2		5	○
Imagine	John Lennon	22	11	4	
Unchained Melody	The Righteous Brothers	22		4	
Locomotion	Little Eva	20	2	4	○
Desperado	Eagles	10	1	4	
If We Hold On Together	Diana Ross	5	1	4	
I Won't Last A Day Without You	The Carpenters	3		4	○
(What A) Wonderful World	Art Garfunkel	1		4	
Good-bye Yellow Brick Road	Elton John	6	1	3	

The Tennessee Waltz	Patti Page	2		3	
Let Me Be There	Olivia Newton-John	2		3	
All I Know	Art Garfunkel	1		3	
The Long And Winding Road	The Beatles	7		2	
Together Again	Emmylou Harris	7		2	
The Sounds Of Silence	Simon & Garfunkel	6		2	○
When A Man Loves A Woman	Percy Sledge	4		2	
The End Of The World	The Carpenters	3	2	2	○
Saturday In The Park	Chicago	4		1	
It Never Rains In Southern California	Albert Hammond	3		1	
Sister Golden Hair	America	2		1	
Jamaica Farewell	Harry Belafonte	1		1	○
When Will I See You	The Three Degrees	1		1	
Swing Low, Sweet Chariot	Eric Clapton	1		1	
I Want You	Bob Dylan			1	
American Tune	Paul Simon			1	
Annie's Song	John Denver			1	○
Please Mr. Please	Olivia Newton-John			1	
Take It Easy	The Eagles	8			
Hotel California	The Eagles	8			○
Fantasy	Earth Wind & Fire	8			
Bridge Over Troubled Water	Simon & Garfunkel	6	1		
Night Fever	The Bee Gees	6			
Save The Last Dance For Me	The Drifters	5			
Hey Paula	Paul & Paula	4	1		○
America	Simon & Garfunkel	1			
The Stranger	Billy Joel	1			
Sara	Bob Dylan				○
Come On Over	Olivia Newton-John				
Love Is Blind	Janis Ian				
Never Had A Dream Come True	S Club 7				○
Tears in Heaven	Eric Clapton				○

表2のアンケート結果を基に授業の教材を選定した。もっとも重視した項目は、「3 学んでみたい」であり、過半数の学習者が丸を付けた3曲は無条件で採用した。それ以外の曲については、この原則によらなかった。学習者が当初学びたいと思った曲とその曲を使った授業での感想との関連を調べたいという目的を指導者が持っていたので、今回実際に使用した曲は、より多くの学習者

が学びたいと思った曲の順に全て採用とはせず、少数の学習者が支持したに過ぎない曲も選定した。さらに、いずれの項目もゼロであった曲も敢えて使用した。また、アンケートに登場しなかった曲であっても、学習者側から曲の提案があればできるだけ採用して授業を行うことも最初に伝えた（実際は、特定の曲を授業で扱ってほしいという希望は出なかった）。

4. 授業後アンケートによる選曲の検証と考察

本項では、事前アンケートによる教材の決定（選曲）が適切であったかを検証する。検証には授業後のアンケートを用いることとし、事前アンケートの結果との相関を検討することにより、選曲の過程の適切さを考察する。

授業では、曲の長さや学習者の反応によって、1曲または2曲を90分の授業で扱った。授業の最後には、その日に扱ったそれぞれの曲についてアンケートを実施し、学習者に6観点による5段階評価と感想等の自由記述を求めた。5段階評価は、「5 そのとおり(Good)」から「1 全然(Bad)」とし、数字が大きいほど、よい選曲だったことが示されるようにした。評価の6観点とは、表3のとおりである。これらの項目の中でも、特に(2)と(3)は情意（楽しさ、リラックス）に直接関連する項目であり、考察の中での中心としたい。また、(4)では、最終的に目指している目標に近づけたと感じたかどうかを尋

ねているが、(4)については、学習者が最終目標だと意識しているかどうかは疑わしいので、あくまで参考として扱う。(1)、(5)、(6)については、今後の参考資料とするにとどめた。(7)は、必要に応じて考察の中で取り上げることにした。

表3 学習者による評価の6観点

(1)	聞いて心地よい
(2)	歌いたくなる
(3)	歌うと楽しい
(4)	英語の力がつく
(5)	他人に教えたい
(6)	後輩にも続けてほしい
(7)	その他（自由記述）

この評価アンケートと事前アンケートをまとめて表にしたのが、次ページの表4である。

表4 事前アンケートと事後アンケートの結果

実施日	実施曲のみ（実施順） 曲名	事前アンケート			学習者による実施後の評価（5段階評価の平均）					
		1知	1歌	2学	(1)心地	(2)歌	(3)楽	(4)力	(5)他人	(6)後輩
4/15	Hey Paula	4	1	0	3.9	3.9	3.8	3.7	3.5	3.8
4/22	Oh, Pretty Woman	23	4	12	4.3	4.3	4.1	4.0	3.8	4.1
5/13	Yesterday Once More	21	13	9	4.4	4.2	4.1	4.3	4.0	4.1
5/20	Annie's Song	0	0	1	4.5	3.9	3.6	4.0	3.9	3.8
5/27	Don't Want To Miss A Thing	22	8	12	4.8	4.0	3.6	4.3	4.5	4.6
6/3	Jamaica Farewell	1	0	1	4.8	4.0	3.6	4.3	4.5	4.6
6/10	Itsy Bitsy Teenie Weenie Yellow Polka Dot Bikini	2	0	5	3.8	3.6	3.7	3.4	3.6	3.9
6/10	Locomotion	20	2	4	4.3	4.0	3.9	3.9	3.9	4.0
6/17	The Sounds Of Silence	6	0	2	3.4	2.7	2.6	3.6	3.1	3.4
6/24	The One	13	3	8	4.7	4.7	4.5	4.3	4.5	4.5
6/24	Never Had A Dream Come True				4.8	4.6	4.5	4.4	4.7	4.7
7/1	I Won't Last A Day Without You	3	0	4	4.1	3.7	3.6	4.1	3.8	3.9
7/1	The End Of The World	3	2	2	4.0	3.5	3.4	3.9	3.8	3.7
7/8	I've Never Been To Me	9	1	6	4.6	4.0	3.7	3.9	4.0	3.9
7/15	Hotel California	8	0	0	3.7	3.3	3.2	3.9	3.8	3.7
7/22	Sara	0	0	0	3.7	2.9	2.9	3.5	3.2	3.3
7/29	I'm In The Mood For Dancing	22	5	12	4.4	4.4	4.4	3.9	4.1	4.1
7/29	Saturday Night	23	3	8	4.1	4.3	4.3	3.3	3.9	3.9
7/30	Honesty	16	1	8	4.6	4.2	4.0	4.2	4.3	4.4
7/30	Tears In Heaven				4.7	4.6	4.0	4.6	4.6	4.6
標準偏差					0.41	0.52	0.49	0.34	0.43	0.39

表4を基に、事前アンケート結果と事後アンケート結果の関係について考察する。前述のとおり、事後アンケートの中で注目するのは「(2)歌いたくなる」と「(3)歌うと楽しい」の2項目である。というのは、これら2つの項目が、楽しく、リラックスした学習環境であることに直結すると考えるからである。表5は、表4を基に事前アンケートと事後アンケートのそれぞれの項目間の相関係数をまとめたものである。

表5 事前アンケートと事後アンケートとの相関⁵

(相関係数)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1. 知っていた	0.37	0.61	0.63	0.20	0.40	0.45
2. 歌ったことあり	0.38	0.45	0.45	0.41	0.36	0.39
3. 学んでみたい	0.52	0.67	0.67	0.30	0.50	0.58

↑
(事後アンケート項目)

(1)	聞いて心地よい
(2)	歌いたくなる
(3)	歌うと楽しい
(4)	英語の力がつく
(5)	他人に教えたい
(6)	後輩にも続けてほしい
(7)	その他 (自由記述)

表5を見ると、全ての項目間の係数が正の相関があることを示しており、なかでも、事前アンケートの「1知っていた」「3学んでみたい」と事後アンケートの「(2)歌いたくなる」「(3)歌うと楽しい」との間の値が、他と比較して大きいことがわかる。このことから、本学科の学生に関しては、事前アンケートにより「すでに知っている」か「学んでみたいと思う」曲を選択することが、「楽しく、リラックスした環境」の中での学習を引き起こす可能性がより高いと言える。

一方、表4に事後アンケート内の各項目の最下部に評価平均値の標準偏差を付加したが、これを見ると、「(4)英語の力がつく」の標準偏差が他の項目より小さいことがわかる。表5には入っていないが、項目(2)あるいは(3)と、(4)との相関を見ると、項目(2)と(4)の間の相関係数は0.58、(3)と(4)の間は0.38であって、い

れも正の相関があると言えるのだが、項目(4)については、標準偏差が小さいことから、曲の間での評価点の変化が他の項目より小さいことがわかる。このことについては、次のように考えられる。前述したように、英語力の伸長は最終目的でありながら、それぞれの授業で見れば、英語力の伸長は副次的に起こると指導者が考えていることがこの結果に影響している可能性がある。指導者がこの考え方に基づいて授業を行うので、授業の中で英語力の伸長を確かめながら進めることをしていないことの影響である。学習者の側から見れば、力がついたのかどうか実感がわからないということになるだろう。本科目の目標を、授業中は楽しくリラックスして学べ、授業後も興味を保持できることとすると考えれば、(4)の項目については、今回は参考とするにとどめておくことが適当である。

個々の曲に対する(7)自由記述を見てみると、曲のメロディーやリズムから受ける印象が「楽しい」、「和む」、「雰囲気がい」などと表現される一方で、歌詞の内容については、「悲しい」、「よい」、「理解しやすい」、「深い」という表現に加えて、「歌詞の意味を知って驚いた」、「もっと(完全に)知りたい」、「難しい」と、授業の指導過程に関するものばかりでなく、授業後の学習につながる記述も見られた。このことから、歌詞の内容解説は今後も行うこととしながらも、できるだけ簡素化し、授業後の自学ができるよう励ますことが大切だと考える。

おわりに

本研究では、目標の設定と教材の選定についての実践研究を行った。選曲については、今回の方法が有効な方法のひとつであることは分かったが、調査結果の因果関係については、さらに詳細な分析が必要となる。しかし、事前・事後のアンケートは、バイアスを避けるために無記名として調査を行っているので、今回のデータについては、より詳細な分析は難しい。今後については、アンケート項目の見直しにより、検証の妥当性を改善することはできると考えるが、一方、記名式のアンケートは妥当性の低下を招くのではないかと考えている。今後の検討課題としておきたい。

これからも、授業の進め方や手法にも対象を広げなが

⁵事前のアンケートのリストに入っていない2曲(“Never Had A Dream Come True”と“Tears In Heaven”)は、相関係数の統計から外した。

ら実践研究を続けたいと考えている。

引用文献

- 白畑知彦ほか. 『英語教育用語辞典』. ㈱大修館書店.
1999
- 土屋唯之. 「英語の歌は生きている!—くわしくやさしい
名曲選」. 南雲堂フェニックス. 1996
- 中嶋洋一. 「“英語の歌”で英語好きにするハヤ技30」.
明治図書. 2000
- Lê, M. H. The Role of Music in Second Language
Learning: A Vietnamese Perspective®. 1999.
<http://www.aare.edu.au/99pap/le99034.htm>
- Lems, K. Music Works: Music for Adult English
Language Learners. in Lawrence, R. L.
(ed.). Artistic Ways of Knowing: Expanded
Opportunities for Teaching and Learning, New
Directions for Adult and Continuing Education,
no.107. Wiley Periodicals, Inc. 2005.
- Murphey, T. Music and Song. Oxford University
Press. 1992
- Schoepp, K. Reasons for Using Songs in the ESL/
EFL Classroom. The Internet TESL Journal,
Vol. VII, No.2, Feb. 2001. [http://iteslj.org/
Articles/Schoepp-Songs.html](http://iteslj.org/Articles/Schoepp-Songs.html)

